

“但馬牛”今昔物語

兵庫県立但馬牧場公園 「但馬牛博物館」

館長 渡邊 大直

第11回「つる牛造成の始まり」（前月のつづき）

いよいよ新たな“つる牛”造りが始まりました。

つる牛は、優れた特徴を確実に遺伝させる家系です。一同じ特徴を持った家系内の牛同士を交配する“系統繁殖”を行って、生まれた子牛の中から同じ特徴の牛を選び、また系統繁殖する—そんなことを繰り返して、その特徴を現す遺伝子をホモ化して造ります。

“あつた蔓”の小代、“ふき蔓”の照来、“よし蔓”の佐津、竹野では、つる牛造成を始める前の状況によって造成過程も違いました。

J Aたじまには「あつた蔓系統図」が保存されています。2メートル四方ほどの紙に“周助蔓”から“あつた蔓”の祖「あつ」、そして「あつ」に続く牛たちの名前が、親の名や生年月日とともに記されています。これに書かれている若い牛は1941年～42年生まれなので、戦後“あつた蔓造成組合”が再結成された頃に書かれたものでしょう。

“周助蔓”から9代目に「あつ」がいます。その後続く家系には、現在の但馬牛のほとんどが祖先に持つ「ふく江」「幸福三」「壱」といった名前があります。また、“周助蔓”5代目から分かれたグループには「茂金波」や「鶴山土井」の母系始祖「甚」や「菊俊土井」の母系祖先「上とく」の名前も見えます。伝説の“周助蔓”が代を重ねて登録牛という現実の牛になり、今の但馬牛に繋がります。そんな過程をこの系統図は物語っていますが、同時に“あつた蔓造成組合”が再結成した時点で“あつた蔓”の土台は殆どできていたことを示す資料でもあります。

この「あつた蔓系統図」と「兵庫県新蔓牛譜 第1編あつた蔓」（1946年）から“あつた蔓”の基礎牛に繋がる家系を拾うと図1のようになります。

小代では、村内で生まれた種雄牛を使う習慣がありましたが、それだけでなく、良い子牛を産む雌牛の子を残し、種雄牛も造って、「あつ」の家系ができていました。

また、この家系では、「あつ」の娘「吉」を母に、曾孫の「熱田」を父とする「吉淵」のような系統繁殖産子が沢山いて、小代には伝統的につる牛造成のノウハウがありました。

そんなことから、「あつ」の系統繁殖産子を基礎牛にして“あつた蔓”の造成が始まりました。

小代でも1935年頃から照来や村岡で生まれた種雄牛の利用が増えていましたが、つる牛造成によって再び系統繁殖されるようになり、「田福土井」や「菊美土井」など但馬牛超主流種雄牛を輩出しました。

城崎郡の佐津、竹野でも、つる牛造成が始まる前から系統繁殖がありました。

1927年に口佐津村に生まれた「よし」は体型、資質、繁殖成績に優れ、この牛の家系を造ろうと、畜産組合が主導して系統繁殖を行いました。この系統繁殖には城一系種雄牛を使ったので、一面「城崎一」の系統繁殖でもあり、“芳重郎系”と呼ばれました。

この地域も先行してつる牛造成が始まっていて、羽部義孝博士の勧めにより“芳重郎系”を“よし蔓”とし、1946年に“よし蔓造成組合”を結成しました。

しかし歴史が浅く、“あつた蔓”のような家系の拡がりや乏しかったことから、系統繁殖というより、極めて近親の牛の交配になり、1950年に“あつた蔓”の「田尻」を基礎牛「あさ」に交配して「奥土井」を造りました。そしてその奥土井系によって黄金期を迎えました。

一方“ふき蔓”の照来には、系統繁殖は無かったようです。

“ふき蔓”は、「ふき」の息子「利中」をはじめとする満重系種雄牛や熊波系種雄牛「茂光」の娘や孫を基礎牛にしました。そんなことから母系はバラエティに富み、“あつた蔓”と関わりの深い牛もいました。そのため基礎牛間の血縁は“あつた蔓”や“よし蔓”に比べ薄く、つる牛造成の取り組みとして系統繁殖を行いました。

“ふき蔓”の特色の第1に、体積、均称が挙げられます。但馬牛博物館に基礎牛となった「茂福」と「まつ花」の骨格標本を展示していますが、「まつ花」は雌牛なのに種雄牛の「茂福」と肩を並べるくらい大き

いのです。発育、増体性に優れる満重系の影響なのでしょうが、満重系が途絶えてしまい、熊波系の「茂福」が基礎種雄牛になりました。

このような経緯で小代の「甚」を始祖牛に持ちながら、満重系の系統繁殖産子となった「たつみ」を母、熊波系の「茂福」を父に持つ「茂金波」が生まれました。

「茂金波」は現在に熊波系をつないだ種雄牛です。元々熊波系は美方郡東部の父系ですが、西部の父系みたいにしたのは「茂金波」なのかも知れません。

このように“あつた蔓”“ふき蔓”“よし蔓”は、それぞれ違う歴史を歩み、今の但馬牛に大きな影響を残す遺伝資源となりました。

図1 あつた蔓の基となった家系

